共訳）『恩讐の彼方に』、里見弴『嫉妬』、山本有三『海彦山彦』（内山貞三郎共訳）、国木田独歩『帰去来』『親子』等である。それからスパンの訳ではないが、倉田百三『七夕祭』、芥川龍之介『虱』、樋口一葉『闇桜』、久米正雄『地蔵教由来』なども訳載された。これだけ次々と近代文学作品の独訳が掲載された雑誌は他になかった。

スパンの訳業で最も有名なものは冒頭に挙げた独訳『坊っちゃん』である。1925年に大阪の共同出版社から上梓されたもので、四六判、238 頁の完訳である。副題に「お人好し」（Ein reiner Tor）とある。スパンは「『坊っちゃん』を独訳して」という文章において次のように述べている。

「夏目漱石氏の坊っちゃんを訳了出版するに当たって、色々の感慨に打たれます。私が、最初これを読んだ時には、其の生彩に富み、溌剌たる独創性の横溢してゐる点で、明治文壇異数の作品であると思ひましたが、自ら其の後教職に就いて、日本に関する研究を積んでからは、所謂『江戸っ子気質』がこれ程巧みに生き生きと描写してあるものは殆ど他に比類を見まいと思ひます。勿論漱石氏の作品中には、より深刻なより偉大なものがあるけれども、坊っちゃんの人間本然的な、闊達にして廉直なしかも同時に優に柔しい性格は独り日本人のみではなく世界万国の人々に同感を起こすものと思はれます。…」

スパン訳は忠実な逐語訳で、原作の気分を傷つけぬように苦心が払われている。それに関してスパンは序文で、英・仏訳本はそれぞれの国民の好みに合わせて故意に自由に訳しているとして不満を述べている。

スパンはその後一時、神戸鉄道病院で独語講師を務めたが、昭和２年再び九州帝国大学講師となり医学部で独語論文の校閲などの仕事をしたが、翌年には久留米の九州医学専門学校（現・久留米大学医学部）にも出講した。ここでは水泳部の部長などもやり、学生たちと親しく交わった。彼の授業はかなり自由で、よく学生たちを外に連れだし実物教育をした。翻訳の仕事はこの頃も続け、上海の独文誌『橋』（Die Brücke）に菊池『小野小町』、芥川『鼻』その他の翻訳を発表した。だが、1934年（昭和９）３月10日付けで九大講師を依願退職後の消息は杳として知れない。一説に彼はある事件のために三池港から密かに貨物船で帰国したというが、真相は不明である。

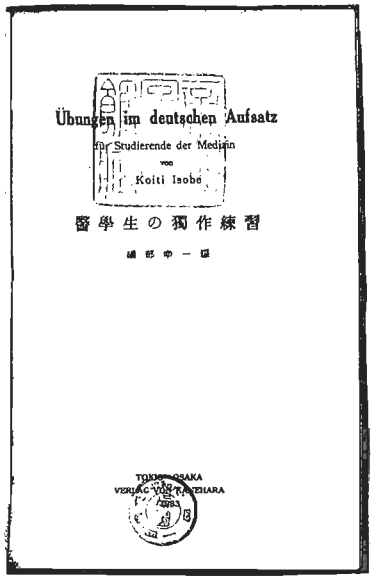
医学ドイツ語学者 磯部幸一

医学ドイツ語学者には本来は医学が専門だが、その修業過程で修得したドイツ語の方に関心が移り、むしろドイツ語学者としての功績が大きい人と、大学や外国語学校でドイツ語・ドイツ文学を専攻し、独語教師となったが、勤務校が医学専門学校であった関係上、医学ドイツ語を教える必要から、次第にその知識を深めていった人がある。前者には高橋金一郎、田中祐吉、賀川哲夫などがおり、後者には村田正太がおり、今回取り上げる久留米医科大学教授・磯部幸一がそうである。人数的には前者がずっと多い。

磯部幸一は1891年（明治24）７月生まれ。1914年（明治44）４月東京外国語学校独語科に入

学し、1913年（大正２）３月独語本科を卒業した。磯部が学んだ頃の東京外語の独語科は黄金時代で、日本を代表するゲルマニスト（独語学者）が教師に揃っていた。即ち山口小太郎、水野繁太郎、大津康、田代光雄といった人たちである。彼らはいわゆる語学の４技能（読む・書く・聞く・話す）を備えた真の実力者たちであった。磯部幸一はこうした優れた教師たちの薫陶を３年間にわたって受けたのである。彼のドイツ語能力の基礎は間違いなくこの外語時代に養われた。またラテン語もこの時代に水野繁太郎から学んでいることも注目される。

履歴書（久留米大学蔵）によると、磯部は東京外語を卒業後、1913年（大正２）９月から1918年（大正７）７月まで久留米の第12師団附きドイツ語教官を勤めた。当時はちょうど第一次大戦が勃発し、極東では日本軍が日英同盟の約定に従い、山東半島の青島のドイツ軍を攻撃した。その結果ドイツ軍は降伏し、多数のドイツ人が捕虜となった。そしてその一部が久留米の俘虜収容所に収容された。従ってそうした状況下で磯部は兵士にドイツ語を教えるだけでなく、ドイツ人俘虜を相手に通訳の仕事も多かったであろう。


Übungen im deutschen Aufsatz
für Studierende der Medizin
von
Koiti Isobe
醫學生の獨作練習
磯部幸一著
TOKYO OSAKA
VERLAG VON KANEHARA
1934

医学生の独作練習

その後一時、私立大阪薬学専門学校の講師となったが、大正８年１月北九州の明治専門学校講師（のち助教授）に就任、1929年（昭和４）３月までドイツ語を担当した。そして同年３月、再び久留米に戻り、前年開校したばかりの九州医学専門学校教授となった。校長は九州帝国大学名誉教授伊東祐彦。磯部はこれ以降昭和21年３月まで同校教授としてドイツ語を担当。「…殊にその間に、医学と独逸語との結び附きを主張して所謂『専門学校の外国語』に対する認識を高めることに努力、またその当時その方面の教科書が殆ど皆無に等しかったので、その拾数年間に弐拾数冊の医専用独逸語教科書及び参考書を編纂して、この方面に新しい通を開拓する運命を荷った。」（『久留米大学二十五年史』）

かくして磯部は医学ドイツ語学者としてドイツ語教育界にその名を知られるようになるのである。彼が特に力を入れたのは、ドイツ語の医文を書く練習であった。『医学生の独作練習』（昭和８年）の序文で「試みに上級生あたりに簡単な医文を書かせて見ますと、独文を読む方面では随分むづかしいものを読みこなせるのに、実に力のないことが歴然として現はれます。全く文法初歩の知識も疑はれるほどの誤謬をやってそれを気付かずにおることが多い」と述べている。

さて、第３回卒業生の筑紫重信が書いた「ドイツ語無用論遭難」（昭和12年）という文章によると、磯部が赴任当初２年全学生を前に「今後ドイツ語で大いに諸君を鍛ふ積りだ」と抱負を述べると、忽ち喧々諤々の論が教室中に鳴り響き、はてはドイツ語無用論まで飛び出して事態騒然、磯部は大いに説得に努めたが、学生達の不平を粉砕するに至らず、いたく失望した。磯部は翌日悲壮の決心で教室に入ると、学生のドイツ語無用論に応えて次のように述べたという。

「諸君が云ふ通り、ドイツ語を知らなくとも医者にはなれるだらう。然からば開業医があの

忙しい中にドイツ語の依頼に来て、私がこの学校に来るまでの十数年の間公務の余暇教へて来た、この社会現象を諸君は何と見るか。医学は日進月歩する。諸君は時勢にとりのこされ、人生の落伍者になってもいゝか。そんな退嬰的人間では活社会を闊歩する者にはなれぬ、苦労し給へ。やがてそれが身の為だ。…」

この言葉が身に沁みて味わされる、と筑紫は書いているが、医学にとってドイツ語の知識は不可欠であるとの確信が磯部にはあったのだ。だが、明治時代と異なり昭和になると医学校においてさえドイツ語不要論が一時的にせよ、出るようなっているのだ。

履歴書によると、磯部は昭和21年３月、久留米医科大学教授となり（28年３月まで）、この間財団法人久留米医科大学理事も務めた。昭和25年３月久留米大学が設立、商学部が開設されと同学部教授となり、ドイツ語、ドイツ文学、ラテン語を担当した。昭和28年３月定年退職したが、引き続き嘱託教授（商学部勤務）として留まった。そして昭和31年１月からは医学部医学進学課程勤務に変わった。この間『医学独文の構造』『独逸医文の書き方』『医学単語3000』『医学生のラテン』等の編著を次々と世に送った。

昭和30年４月から35年３月まで九州大学分校（教養部）の非常勤講師を務めた。当時九大教養部の学生だった筆者はドイツ語を教わった。それは昭和35年の２年生の時で、その年の前期の購読の時間にG・ケラーの『七つの伝説』を読んだ。相手が文学部生だったので、得意な医学ドイツ語ではなく、こうした文学作品を教材に選んだのであろう。独特の抑揚のある声で訳読を進めていった師の様子を思い出す。

久留米において終始ドイツ語、特に医学ドイツ語を講義し続けた磯部幸一は、1963年（昭和38）４月23日に世を去った。

九州帝国大学法文学部講師ライントエス

九州帝国大学に法文学部が創設され独文科が置かれたのは1925年（大正14）８月であった。この時に東北帝大にも独文科が置かれたが、これらは国立大学の独文科としては東京、京都両帝大に次ぐものだった。そして初代独文科教授には三高教授兼京都帝大文学部講師の片山正雄が任命された。助教授には1927年（昭和２）佐藤通次が就任した。だが独文科専任の外国人教師はいなかった。今日から見れば奇異に思われるかも知れないが、九大独文科に専任の外国人教師が雇用されたのは昭和30年代になってからである。これは専攻生が少なかったこともあるが、戦前ではドイツ語教育の中心は大学ではなく、旧制高校にあったことが大きい。独語に限っても旧制高校には大抵少なくとも１人は専任の外国人教師がいた。五高では２人いたこともある。そういうわけで初期の九大独文科では旧制福岡高等学校の教師だったハインリヒ・ライントエスが講師嘱託として授業を担当したのである。

さて、筆者の手元には現在九大文学部に保存されているライントエスの履歴書の写しがある。それによると「原籍独逸国ハンデルナッハ」となっており、1885年４月27日に生まれている。ただしこのハンデルナッハという地名はドイツ地名辞典に出ていないところを見ると、アンデ